

6月に入って新緑ラインは1500m～1800mまで一気に上がって来まして、今日漸く2000m近くに達した様です。殆どの遊歩道で残雪も消えいよいよ志賀の夏山が始まりました。

夏山シーズンの到来に合わせて、6月4日には岩菅山開山祭、11日の今日は第11回志賀高原新緑祭が開催されました。続いて、7月1日には横手山・志賀山の両開山祭、下旬には焼額山開山祭が予定されております。

今号では、5月～6月の様子をお伝えします。
又、前号でお約束した琵琶池の昔話をお送りします。



5月27日の信州大学自然教育園



6月8日の新緑の一沼



6月11日の一の瀬の白樺林

昔話「琵琶池とびわ法師さま」

むかしあるところに一人の目の見えない法師さまがいました。法師さまは山奥から降りてきてはお寺の境内にすわって美しい音色の琵琶をかなでるのでした。村人はその音色を楽しみにし、お礼に竹の子の煮物やのびろのおやきを上げ、法師さまもよるこんで村人の好意いただきました。それがある日突然法師さまの姿が見えなくなりました。

ある山奥にあい色に澄んだ美しい池がありました。山はしんと静まり返って何の音もしません。その池のほとりに大きな石がありました。法師さまはそこに座って琵琶をかきならしはじめました。ある時は喜びに高ぶるように、又ある時は乙女がむせび泣くように、その美しい音色に風さえ止むほどで毎日聞こえて来ました。それから10日目の昼、一人の大きな老人が法師さまの前にぬーっと突然あらわれ、

「お前の琵琶を毎日聞かせてもらった。まったくよい音色じゃ。もう一曲だけ聞かせてくれ。その代わりわしの秘密を教える。実はわしはこの池の主の大鯉じゃ。明日は池のほどを抜いて、ふもとの村を押し流すつもりじゃ。このことは絶対に他人に言ってはならぬぞ。もしやべればお前の命は無いですえ。よいな。」

というが早いか老人は雲をつくように仁王たちし、口をぱくりと動かし、ドブーンと大きな音をたてて水の中に消えてしまいました。

法師さまは驚きのあまり気絶してしまいました。夕方になって気がついた法師さまはさっきの老人の言葉を思い出し、「そうだ、こうしてはおられぬ。早く村に行つてこのことを知らせなければ。」と立ち上がり、琵琶をかかえて山をかけるように下りました。下る途中「他人に知らせれば、お前の命はないと思え」と言う言葉を思い出しては足を止め、村人のことを考えては足を進め、ようやく村にたどり着きましたが、法師さまはまだ迷っていました。「村人を助ければわしの命がなくなる。どうしたらよいのだろう。」とつぶきながら、ふと一軒のわら屋根の家の前に立っていました。そうすると中から戸が開き、女の人が顔を出し、

「あれあれ坊さんじゃねえかね。こんなに遅くどうししたえ。まあ、上がってお茶でも飲んでくんなさい。」

と家の中に誘いました。家の中にはじいさまとばあさま子供達がいろりを囲んでいました。ばあさまは

「さあ、上がっておくんなして。ごはんはまだだんかい?おじやがあるから食べてくんな」

そういっておじやをよそって法師さまにさし出し、

「ほんとにまあどこへ行ってらっしゃったえ。坊さんの琵琶の音が聞けねで、村はさびしかったでや。」

と言い、子供たちも寄ってきました。

法師さまは久しぶりの温かい麦のおじやを食べ、みんなの親切が身にしみました。「ああそうだ、秘密の話があったんだ。」と法師さまは池の主の言ったことを話しました。

それを聞いたみんなはたまげて、さっそく名主の家からあちこちに連絡が入り、村人全員夜のうちに、水の届かない小高いところまで逃げました。

夜が明け始めたころ、雨が降り出し、たちまちに大雨となり、見る見るうちに洪水となって横湯川は家々をのんでしまいました。3日後、雨は少しずつ止み始め4日目に雨はやみました。大洪水でしたが、村人は避難をしていたため全員無事でした。

村人たちは、しばらくの間は洪水であれた土地を元通りにと一生懸命はたらきました。だんだん落ち着いてきた村人達はあの不思議な法師さまのために助かったことを思い出し、お礼を言いたいと探し始め、山奥の池のことを思い出し、池まで探しに登ってきました。やがて池に着いた村人たちはあたりを探してみましたが、法師さまの姿は見当たりません。とある村人が、池の真ん中に浮かんでいる琵琶を見つけました。そして、大洪水のことを他人にしゃべった法師さまが池の主の怒りにふれ、命をたたれてしまったことを知り、皆大粒の涙を流して泣きました。そして、池に向かって「なむあみだぶつ、なむあみだつ」と拜んで目を開けてみると、琵琶がだんだんと池のふちまで近づいてきました。村人たちは琵琶を抱き上げ、

「法師さまありがとうございます。ありがとうございます。」と口々に言いました。

琵琶を抱いて下った村人は名主さんに池のことを話しました。名主さんは琵琶に手をあわせると、寺に持って行って、ねんごろにお経をあげてもらいました。このことがあってから、山の池を琵琶池とよぶようになり、池の形もだんだんと琵琶に似てきました。